

# 熱帯アジアの遺跡とその保存・活用

## パガン遺跡を中心に

西村 幸夫

東京大学大学院工学系研究科教授

私の専門は都市計画です。観光化の波のなかで大きな変化が予想されるパガン遺跡の保存と観光を、どう両立させていくかが重要な問題になっています。そして、地元に住む5万人以上の人たちの生活の向上と伝統的な文化の保存を図るためのマスタープランを現在策定中です。このマスタープランは、ユネスコのなかにある日本政府の信託基金をもとに、地元ミャンマーと日本、インド、フランスの専門家などが共同で検討しています。

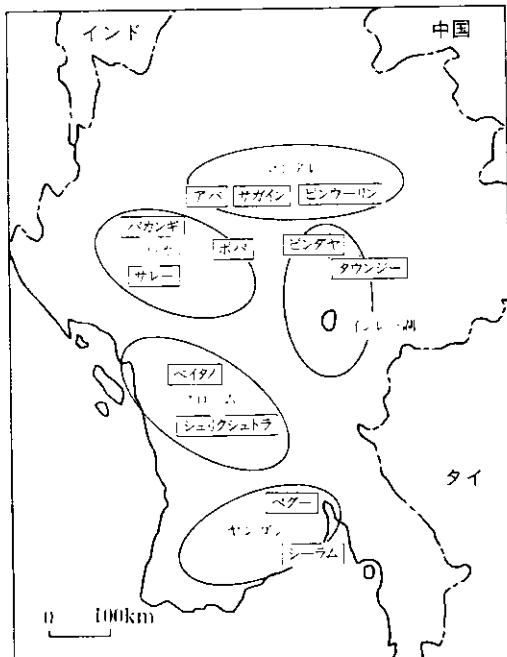


図1 ミャンマーの観光ゾーン

### ミャンマーの現状

まず、ミャンマーについて簡単に紹介しておきます。1988年の民主化要求デモのち、1990年5月に複数政党制による総選挙が実施されました。その結果、アウン・サン・スーチーが率いる国民民主連盟(NLD)が圧倒的な勝利をおさめました。軍事政権がそれを無効として大半の活動家を政治犯として拘束する騒動が起きました。アウン・サン・スーチーはようやく1995年に自宅軟禁を解かれましたが、その間にノーベル平和賞を受賞しています。現在も軍事政権が続いているため、アメリカを中心に人権問題で非難されており、西側諸国からの援助がまったく途絶えています。その意味でも、遺跡保存の国際協力はなかなか困難な立場にあります。

ただ、軍事政権は、それまでのネ・ウイン



図2 パガン遺跡の広がり(その1)



図3 バガン遺跡の広がり(その2)

政権と違って経済的には解放政策的な色彩を次第に強くし、近年では中国との関係を強くしているため、このところ首都ヤンゴン(もとのラングーン)や北部のマンダレーを中心に建設ラッシュが起きています。外国人の投資を歓迎しており、外国人向けホテルも多く建設されています。そのような影響がバガン遺跡にまで及んでいます。

ちなみに、観光地としては、バガン遺跡以外に、ビルマ族の最後の王朝があったマンダレー、高地の水上住宅があるインレー湖などがあります。また、プロームにも古代遺跡があります。そして、首都ヤンゴンが観光の基地となっています(図1)。

#### バガン遺跡の概要

バガン遺跡は、ヤンゴンの北西約550km、イラワジ川の東側に位置し、ビルマ族による初の統一王朝であるバガン王朝の都として11世紀から13世紀にかけて栄えました。インドネシアのボロブドゥール、カンボジアのアンコール・ワットとならぶ東南アジアの3大仏教遺跡のひとつです。

このバガン遺跡の周辺の約113km<sup>2</sup>に及ぶ、1

辺10km以上もある範囲内に、現在確認されているだけでも2,217件の遺跡が分布しています。これにマウンドのようなものを含めればさらに数がふえるといわれています。無数のパゴダが地平線の先まで望見することができます(図2)。そして、図3で白くみえるパゴダは、現在も信仰の対象になっているものです。各集落は、それぞれ異なったひとつのパゴダをたいせつに護持しており、信仰しているパゴダは、毎年、ホワイトウォッシュされます。高い山の頂きにはほとんど必ずパゴダが建っており、世界でももっとも多くパゴダがある国だといわれています。現在でも信仰が続いている敬虔な仏教徒の国です。

1975年にビルマ(当時)中央部を襲った地震によって、多くの遺跡が被害をうけましたが、ユネスコによる修復プロジェクトが進められてきました。

バガン地域の中心部を図4に示しますが、遺跡地域内部に確認されたものだけで2,217件の遺跡が分布するとともに、20の集落があり、1994年現在、合計51,400人が居住しています。そのため、どういう形で住民の生活と遺跡の保存を両立させていくかが大きな問題になっ

ています。

ちなみに、2,217件の遺跡を3ランクに分類して、もっとも重要な遺跡と次のランクの遺跡の分布を調べると、旧パガン城壁内とその周辺に分布していることがわかります(図5)。

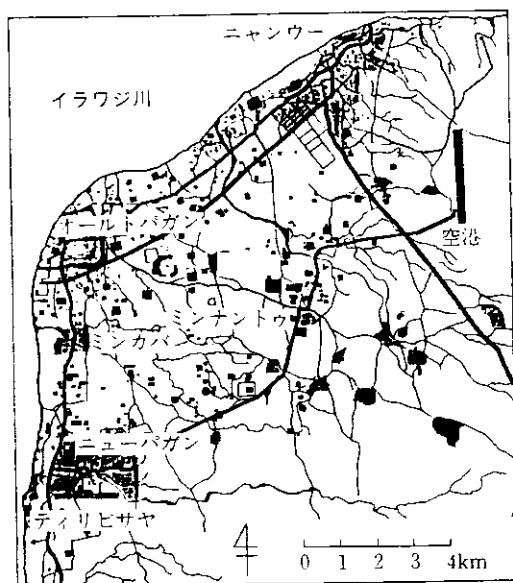


図4 バガン地域の集路と道路網

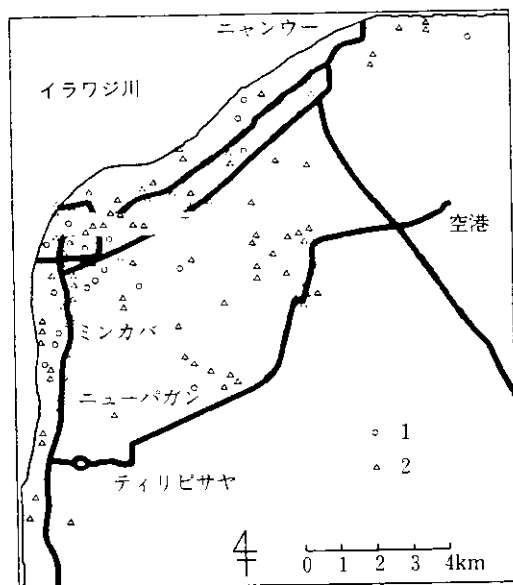


図5 バガン遺跡の主要モニュメント(ランク1、2のみ)

### バガン遺跡内の建築様式

バガン遺跡では、さまざまな形態の建物がみられます。バガン王国は純正なアーチ構造を実現させる建築技術をもっていたことで有名です。その技術により、大きな建物の内部に仏像を安置することのできる広い空間を生み出すことが可能になり、独自の建築様式を創出できたのです。そして、主要なパゴダや祠堂は1棟1棟の建物の形態や大きさが異なり、それぞれの寄進者がさまざまな工夫を凝らしていたこともひとつの特徴です。図6は今でも信仰されているシュエジゴン寺院のパゴダです。

スタッコがよく残されている建物もあります。図7はシンビュウシン神殿のエントランス部分で、チュロッチュと呼ばれる火焰型のバガン特有の様式がみられます。図8は一般的な祠堂で、木造の母屋の跡が残っています。これからわかるように、聖なる宗教空間は主として煉瓦造で、その手前に木造の僧院部分

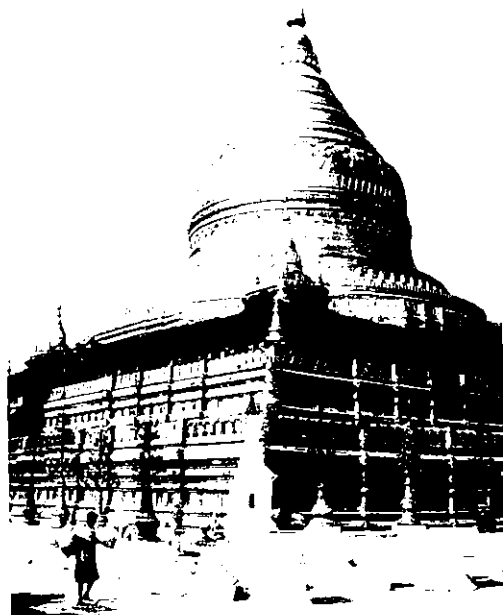


図6 シュエジゴン寺院のパゴダ

がついていました。この木造部分はすべて朽ちてなくなっています。なお、パガン地域の建造物はほとんどが煉瓦造で、石造建物は全域で4棟だけです。

これら寺院内には壁画が描かれています。図9に示す壁画は少し特別で、一部切られた跡が認められます。19世紀末、ドイツの研究者で探検家が、この壁画をもちかえろうとして新聞を接着剤で貼りつけ、ナイフで1枚1枚はがそうとした跡です。このような破壊の跡を、地元の人たちは文化財保護のための生きた教材にしたいと述べていました。このように、人為的に破壊されたり、現地の住民による盗掘も続出しています。

また、この遺跡の周辺にさまざまなゲストハウスが建設されたり、そのほかの開発によって景観が壊れるなど、各種の破壊が起きています。

一方、前述のように、1975年からユネスコによる修復プロジェクトが進められ、その後、

壁画修復や遺跡総目録の作成などの事業がユネスコや国連開発計画(UNDP)の支援によって行われてきました。しかし、それに関する図面や報告書がほとんど発表されていないため、過去の遺跡調査・修復の際のデータがほとんどわからず、記録のとり方に問題がある



図8 祠堂の壁面に木造僧院の母屋の痕跡がみえる

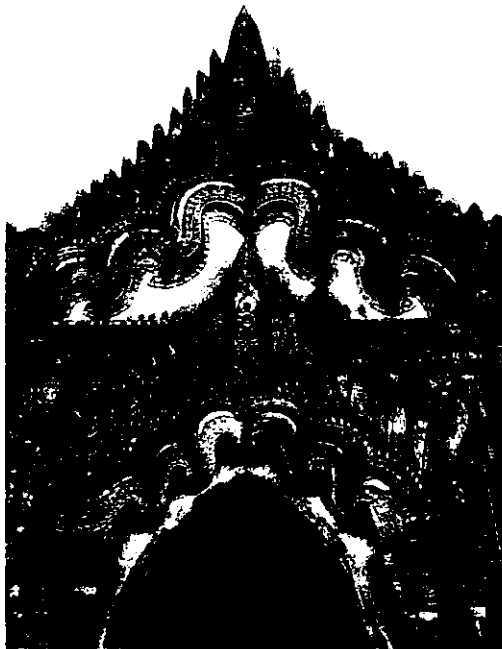


図7 シンビュウシン神殿のエントランス上部の破風にみられるチュロッチュ



図9 切れ目をいれて一部盗まれたチャンシッターウーミン寺院の壁画

のではないかと指摘されています。

#### バガン遺跡での保存修復活動

図10に小さな祠堂を示します。その2棟の祠堂は、ヤンゴンに赴任していたUNDPの関係者のひとりが離任する際に、ポケットマネーを寄進して修復された建物です。地元からたいへん感謝されています。この1棟を修復するのに10~20万円です。第2次世界大戦における日本軍のインパール作戦によって、ミャンマーで多くの日本兵も亡くなっていますが、慰霊の意味もこめて、これらの修復に対して多数の市民が援助できるような体制ができればよいのではないかと考えています。

ところで、バガン遺跡には19世紀に建設された木造の僧院がいくつか残っています。図11の僧院は現在も使われていますが、古い工法で建設されています。それらのいくつかは、新しい大工道具を使って修理されていますが(図12)、木造に関する知識が乏しく、建設年代が新しいこともあり、煉瓦造のパガン王朝

時代の建物に比べると、保護が充実しているとはいえないのが実状です。

地元の人たちが重要だと考えている建築物は11~13世紀のものばかりで、現在使われている寺院や木造建築に関しては評価が低くなっています。しかし、訪れる観光客にとっては、それらも伝統的な文化や生活の一部であり、観光資源でもあります。保存に関するマスタープランを制定する際に、きちんと位置づける必要があると考えています。

一方、王宮部分はミャンマー政府の考古学局の手で少しずつ発掘が進められています。ただし、その正確な報告書は発表されておらず、発掘されたまま放置されています(図13)。そのため、破壊を促進させているのではないかと心配しています。旧バガンの周囲に残されている環濠も、現在復元が進められています。

旧バガン内にはいる門として、唯一タラバ門が残っています。その内部にかつて5,000人以上が居住し、観光客のためのゲストハウス



図10 個人の寄付で修復された小祠堂

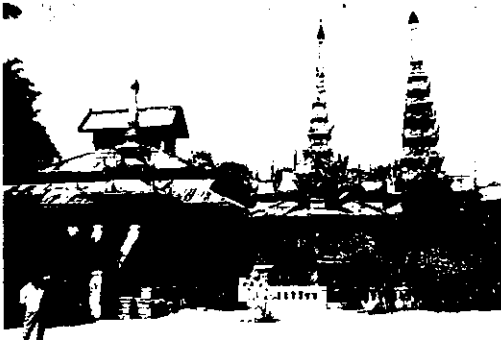


図11 ナツタウン僧院の木造建築



図12 木造僧院の修理に用いられている大工道具

や土産物屋などを営んでいました。しかし、王宮を発掘するという理由で、1990年にすべての居住者が強制的に移住させられてしまったため、現在、旧パガン内には誰も住んでいません。人が住むことで、ある意味で表土を管理していたのですが、まったく人がいなくなったため、土地が荒れ、保存上の問題も生じています。

#### パガン地域住民の暮らし

パガン地域内には、前述のように20の集落があり、5万人以上が居住していますが、生活水準はきわめて低く、2市域を除く主要15集落のうち、電気がきているのは3集落だけです。また、飲料水を近くの川や水道タンクまで1時間以上かけてとりにいく集落が7集落あります。多くは、ウシにひかせて水をくみにいくといった生活をしています。そして、住居のほとんどは、ニッパヤシ葺きの高床です(図14)。

これらの集落の住民は農業を営んでいます。そのことが地下の遺跡の保存につながっているため、これからも農業を続けてもらいたいわけです。また、ここでの景観そのものもミャンマー中部の伝統的な農村集落を表しているため、なんとかその特質をいかし、守りながら、なおかつ生活の向上を図っていくことが課題となっています。

そこで、集落のさまざまなニーズや状況を



図13 発掘されたまま放置されているパガン王宮跡

悉皆調査でヒアリングしました。このような学術調査がはいつたのは、地元の考古学局によると戦後初めてです。これまで調査の許可はおりにないため、私どもは貴重なデータをえることができたと考えています。

これらの集落には、農村がもつさまざまな伝統的産業や家内工業がいまだに生きています。パガンには漆の伝統が古くからあります。現在も主要な土産物としてかなり高価なものも売られており、貴重な外貨獲得に貢献しています。また、日干し煉瓦をつくることが主

要な産業になっている集落もあります。

図15はゴマ油を絞っている様子で、ゴマ油は主要な農産物のひとつです。葉巻も換金商品のひとつとして生産されています。農村の風景だけをみると、落花生やゴマの畑がみえるだけですが、各集落はそれぞれに小さな商業生産のネットワークをもっています。綿織物やバンブーマット、壁材、マット材なども商品化されて流通しています。馬車をつくることに特化している集落もあります。

食文化もユニークです。ビルマから中国の雲南省にかけてはお茶の原産地として有名ですが、ここには食べるお茶の文化が生きており、現在でも普通に食卓にてできます。

先述したように、それぞれの集落には祭礼を行うパゴダがあり、年に1度、集落ごとに定まったある特定の日にお祭りを催しています。大半は満月のときですが、それぞれの集落のお祭りが重ならないように調整されているらしく、1年中、どこかの集落で満月もしくは新月のときにお祭りが催されています。その際には、生きた信仰と風俗をみることが

できます。アーナンダ寺院では、1月の満月のときにお祭りが行われます。このお祭りは、パガン地域で最大規模を誇り、交易の場としても機能しています。年に1度のバザールの役割を果たし、さまざまな商品が売買されています(図16)。

#### パガン遺跡の保存と開発

以上がパガン遺跡の現状です。

近年、ミャンマー政府は観光に力をいれるようになりました。1990年にミャンマー観光法を制定し、観光産業は民間および外国投資家にひらかれました。さらに、1993年には新観光法が定められ、外貨の獲得、地域開発、雇用の創出、ならびに文化遺産・自然環境の保護を通じて国家経済へ貢献することがその基本理念とされました。

このところ外国人旅行者数も急増し、1993年には前年比130%増の61,335人を記録しています。そして、1996年をミャンマー観光年とうたい、当初、年間50万人の外国人観光の誘致を計画していました。現在では計画をやや



図14 パガン地域の典型的な農村集落



図15 ゴマ油絞り(撮影 鈴木伸治氏)



図16 アーナンダー寺院の祭礼風景(1995年1月)

下方修正し、30万人体制で観光客を呼ぶキャンペーンを進めているようです。民間航空会社の設立や国際水準のホテルの建設を、ヤンゴンを中心に行っています。

その余波がパガンの町にも押し寄せています。旧街道沿いに地元資本によるレストランやゲストハウスの建設が進み、大規模な国際ホテルの計画も進行しています。パガン地区における現在のホテル室数は400室で、1996年にはこれを1,000室にまでふやそうと計画しています。このホテルに通じる広い道路の建設もほぼ完了しています(図17)。また、パガン地域に住んでいた5,000人以上の住民が、新しい集落に強制移住させられたためニュータウンもできています。さらに、パガン付近でゴルフ場の開発も始まっているとのこと。

なぜ、このように多くの開発が起こるのでしょうか。開発を認可しているのはホテル観光省です。観光客は貴重な外貨の獲得手段となっているため、なるべく開発を推進したいわけです。そのため、保存を担当している文化省と常に対立しています。しかし、予算規模や、さまざまな利権などもホテル観光省のほうがはるかに強くなっています。現在、軍事政権で、どちらの大臣も軍人ですが、ホテル観光省は文化省の許可をえずにホテルなどの開発許可を与えています。現地では実際の開発が始まると、それを発見した文化省はあわ

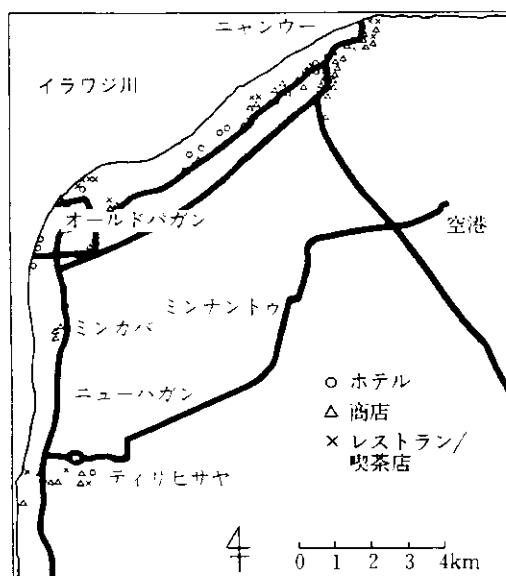


図17 パガン地域の施設分布(1995年現在)

てとめるといったことを繰り返しています。全体の開発を調整するための連絡調整会議のような機関が、国レベルでも地方レベルでも存在してはいるのですが、なかなかうまく機能せず、いろいろな問題が生じています。

保存マスタープランの制定に向けて

開発と保存の問題があることから、考古学局は、1994年にパガンにおいて遺跡の保全と無秩序な開発を防止するために、保存のゾーニングを地方条例によって定めています(図



18)。中央部の遺跡ゾーン(31.1km<sup>2</sup>、27.5%)、その周辺の考古学ゾーン(26.0km<sup>2</sup>、23.0%)、さらにその外側に広がる保護ゾーン(56.1km<sup>2</sup>、49.5%)の主要3ゾーンを含む計7ゾーンからなっており、既成市街地や既成集落を除いています。そして、将来的にホテルを建設してもよいとされる区域は、パガン遺跡周辺の113

km<sup>2</sup>の外側に指定し、これ以外の開発は既成市街地以外ではできないという規程を定めて施行していますが、必ずしもうまく機能していません。また、開発行為をチェックするシステムもうまく機能していないようです。

よりよい体制をどのようにつくっていくかが問題です。合理的なゾーニングとそこでの

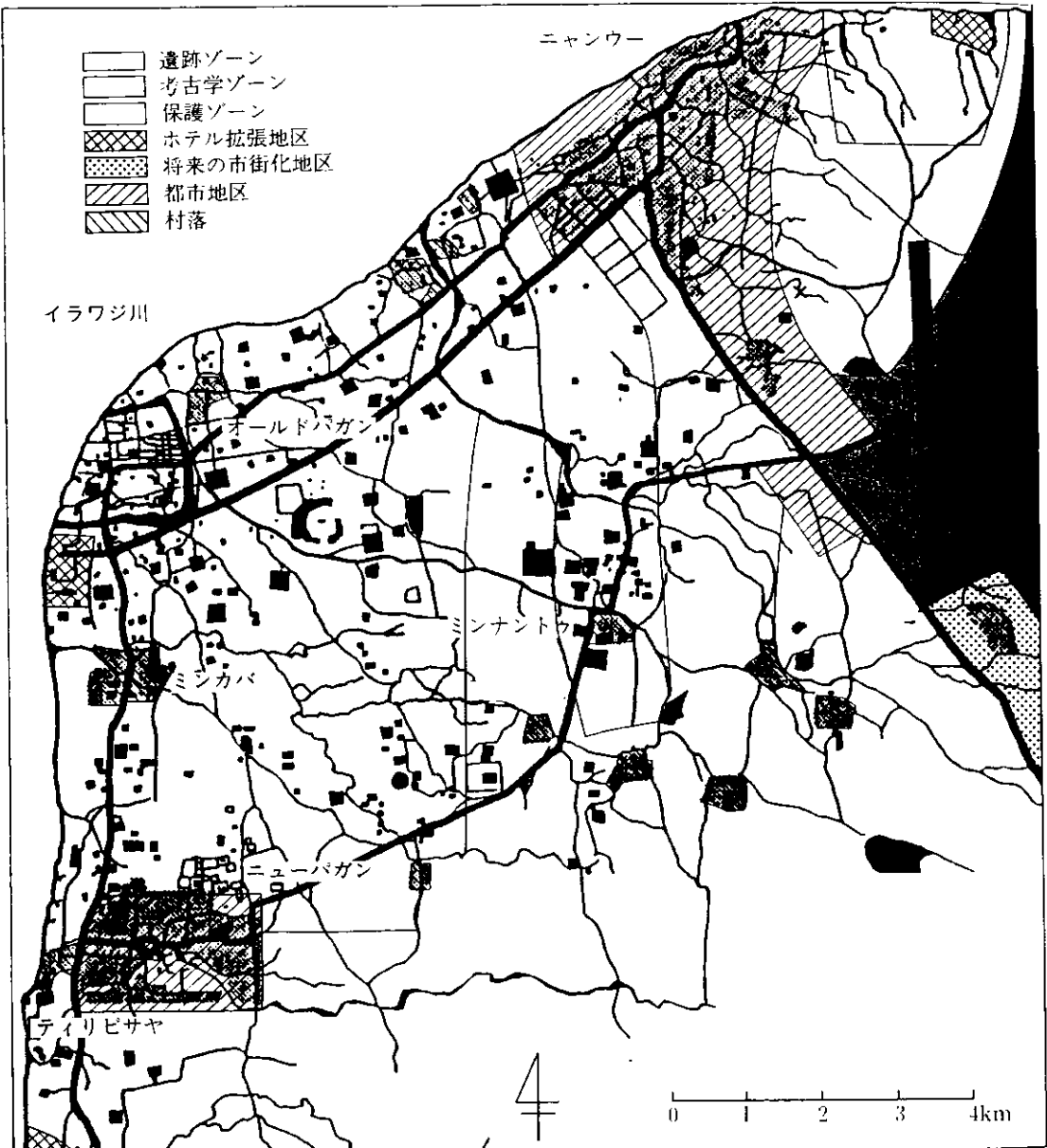


図18 1994年、条例によって定められたゾーニング

規制が必要になります。例えば、高さは、2階建てがよいのか3階建てまで許されるのか、木造の仮設的な住宅であれば許されるが、コンクリート建物は許さないとか、地区によって調整しながら実効性のある計画をたてるため、現在、調整している最中です(図19)。

そして、主要幹線以外ほとんどの道が舗装

されていません。農業的な利用も含めて、既存の集落にあまり迷惑をかけない形で、観光客の流れと生活の流れを少しわける形での経路を提案しています(図20)。土地利用に関して、なにがよくて、なにがダメなのかをもう少し明確にしながら、地形的な手がかりを頼りにゾーニングを行うようにしています。

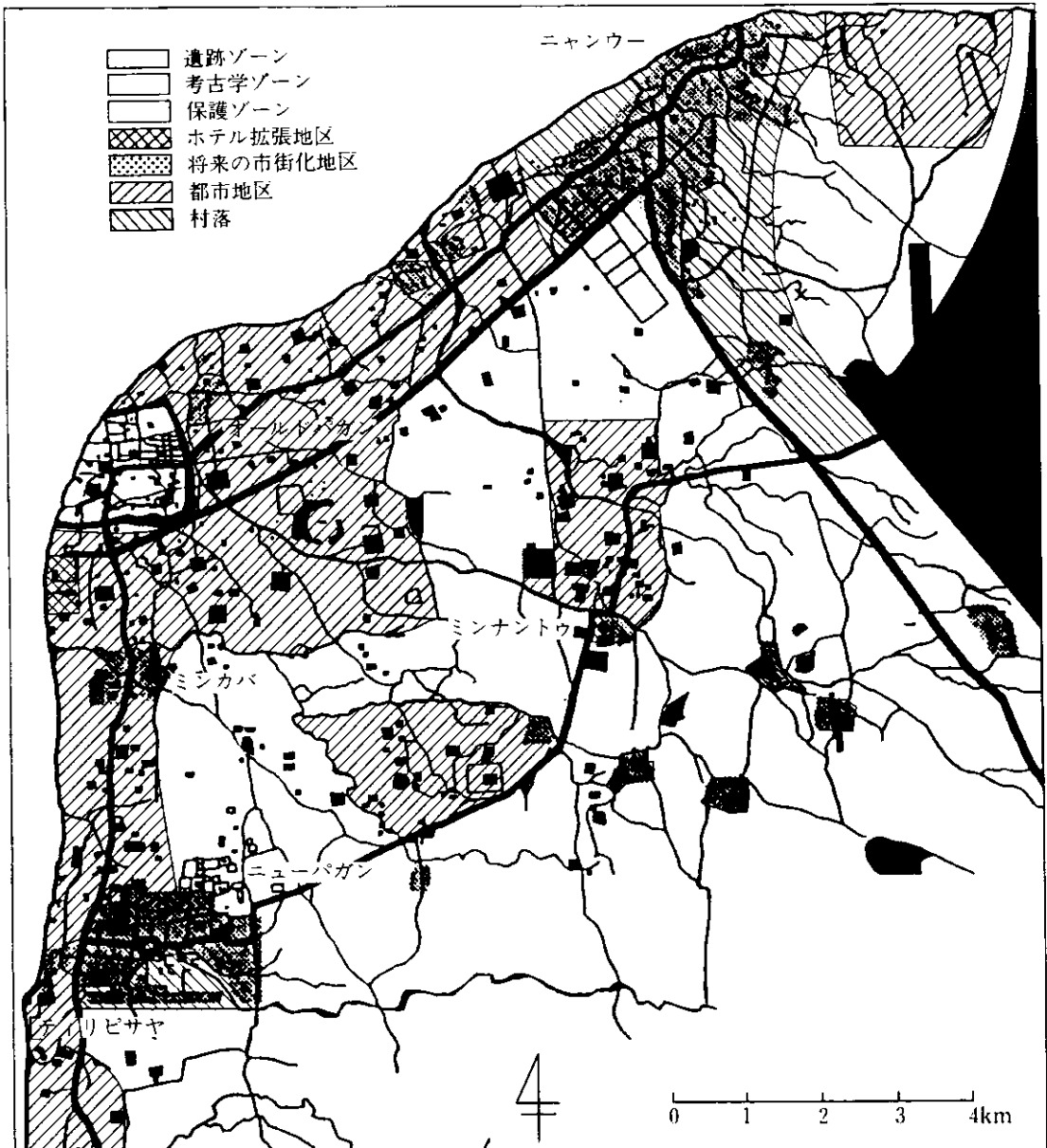


図19 作成中のマスタープランによるゾーニング(案)に主要モニュメントを重ねたもの

ただし、きちんとした地図がないため、その作業がなかなか進みません。今使っている地図は、イギリスが宗主国であった今世紀初頭頃のもので、地図をつくるため、ユネスコと共同で飛行機を飛ばし、航空測量を行っています。

実効あるマスタープランの策定が重要課題で、それができて初めて、開発と保存のバランスを保つことができます。凍結保存することは困難で、非現実的です。住民の生活レベルを向上させるとともに、世界中の人々にもっともよい形でパガン遺跡を知ってもらうようにすることもひとつの願いです。

同様のマスタープランが、各地で制定されています。ボロブドゥール(インドネシア)では1976年に、スコタイ(タイ)では1982年、アンコール(カンボジア)では1993年に保存計画が立案されています。どれだけ実効性をともなった計画がたてられるかは、地元の責任ある団体と共同して、実行組織をいかに作りあげるかにかかっています。外国人がきれいな絵を描いて提示すればよいというもので

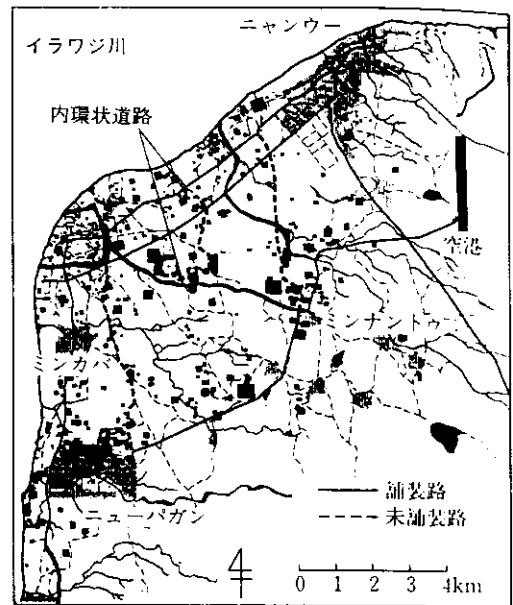


図20 作成中のマスタープランによる道路網計画(案)

はありません。ひらかれた計画立案のプロセス自体が、遺跡を守るという、地元の人々に対する教育的、啓蒙的な意味をもつと考えています。

## Q&A

### ■ Q ■

パガン1基の修復費用が10～20万円というのは、一般人にも参加しやすいと思います。そのような活動をリードしている機構や組織があるのでしょうか。

### ● A ●

まだありません。それについ

ては、現地の人たちとも議論しているところです。ミャンマーの文化省も協力的でうけいれたいという話があります。文化財修復に協力すると、その旨を記した石版を貼るなど、その人が資金をだして修復した石塔が何百年と残っていくシステムをつ

くれると思います。

このことを発表したのは今日が初めてですが、関心をもってくださる方が多いのならば、その可能性を試してみたいと思います。 ☆